Title	メルロ=ポンティにおける弁証法概念受容：ジャン・イポリットとの関係に注目して
Sub Title	The reception of the concept of Hegel's dialectic in Merleau-Ponty : focusing on the interaction with Jean Hyppolite
Author	常深, 新平(Tsunefuka, Shimpei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2023
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.150 (2023. 3) ,p.35- 58
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, I explore the reception of Hegel's dialectic in Merleau-Ponty and situate his thought within the history of philosophy in France after World War II. I show biographically and bibliographically that he, along with Hyppolite, interpreted Hegel, and both of them shaped another current of Hegelian reception in France, distinct from Kojève's. This paper has identified two characteristics of their interpretation. First, Merleau-Ponty and Hyppolite's interpretation of Hegel is as follows. The concept of the Absolute, which dialectical movement towards, makes possible a negation of negation; therefore, the dialectical movement is "the dialectic without synthesis," which continues infinitely. Second, in finding the dialectical movement of an experience, both proceeded to analyze each nature of the object of experience or each domain of expression and concentrated on clarifying the rules of the use of symbols within that domain of expression. Their understanding of the concept of Hegel's dialectic I elucidate seems to be actual in educational thought in France after World War II. Namely, the theory they derive can be a flexible way of thinking about human beings. This is because it will depict human beings who rationally cope with current contingent situations and develop various patterns of recognition toward the world rather than being recovered in a "grand narrative" that aims at a single ideal image or holistic development.
Notes	特集：教育学特集号 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000150-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メルロ＝ポンティにおける
弁証法概念受容

——ジャン・イポリットとの関係に注目して——

常 深 新 平*

**The Reception of the Concept of Hegel's Dialectic in Merleau-Ponty:
Focusing on the interaction with Jean Hyppolite**

Shimpei Tsunefuka

In this paper, I explore the reception of Hegel's dialectic in Merleau-Ponty and situate his thought within the history of philosophy in France after World War II. I show biographically and bibliographically that he, along with Hyppolite, interpreted Hegel, and both of them shaped another current of Hegelian reception in France, distinct from Kojève's. This paper has identified two characteristics of their interpretation. First, Merleau-Ponty and Hyppolite's interpretation of Hegel is as follows. The concept of the Absolute, which dialectical movement towards, makes possible a negation of negation; therefore, the dialectical movement is "the dialectic without synthesis," which continues infinitely. Second, in finding the dialectical movement of an experience, both proceeded to analyze each nature of the object of experience or each domain of expression and concentrated on clarifying the rules of the use of symbols within that domain of expression. Their understanding of the concept of Hegel's dialectic I elucidate seems to be actual in educational thought in France after World War II. Namely, the theory they derive can be a flexible way of thinking about human beings. This is because it will depict human beings who rationally cope with current contingent situations and develop various patterns of recognition toward the world rather than being recovered in a "grand narrative" that aims at a single ideal image or holistic development.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程

はじめに

モーリス・メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908–1961) は生涯を通して、人間の知覚に、および人間と世界との関わり方の変容に対して関心を払ってきた。もしかすると、彼の探求対象は、ドイツの教育哲学における「陶冶論 *Bildungstheorie*」で探求される「陶冶 *Bildung*」に相当すると言って良いのかもしれない。この *Bildung* という語は、一方ではプロセスとして自己形成あるいは人間形成と訳され、もう一方ではその結果として教養と訳される。言い換えれば、この語は、人間の知覚 – 認識の質的変容を意味するのみならず、そのことによる社会・文化の変容までも射程に入れた知のダイナミズムのことを指している。ここで、メルロ＝ポンティの哲学は、まさにこの陶冶論を探究しようとしたと想定されるのである。

この想定は、単にメルロ＝ポンティの関心がこの事態に向けられていたように見えるという推測にとどまるものではなく、以下のような検討に値する根拠に基づいている。すなわち、彼は、意識の陶冶過程を叙述したヘーゲルの『精神現象学』を好んで読み、そこから「弁証法的運動」について思索を巡らせ、独自の表現論および存在論を形作っていったということである。これまでメルロ＝ポンティ研究では、メルロ＝ポンティが後に作り上げる存在論に、彼のヘーゲル読解およびヘーゲル由来の弁証法概念理解がいかに寄与したのかという点への解明がされてきた (cf. Cueille 2000, Dastur 2009, Hirose 2015)。こうした成果に基づけば、彼の陶冶論理解とそれに基づく彼の哲学的探求は、ドイツ陶冶論の歴史の一端を担っているヘーゲルの『精神現象学』が源泉にあると言えよう。しかし、メルロ＝ポンティによる『精神現象学』の読解、およびヘーゲル由来の弁証法概念に対する理解自体への研究は途上段階にある¹。つまり、現在、ヘーゲルおよびヘーゲルの弁証法概念に対するメルロ＝ポンティの理解が、彼の存在論にいかに繋がるのかではなく、そもそもどのようなものだったのか・ど

のような仕方で作られていったのかについて、立ち戻って解明する必要があるのだ。これを解明して初めて、メルロ＝ポンティの理論がドイツ由来の陶冶論の伝統といかに親和的であるのかが明らかになり、彼の「陶冶論」を論じることが可能になるだろう。

そこで、本稿は、メルロ＝ポンティにおけるヘーゲルの弁証法概念解釈の特徴を、第二次大戦後のフランス哲学史の中で明らかにすることを目的とする。この解明にあたって、メルロ＝ポンティが誰のヘーゲル解釈を参考にして弁証法概念を取り入れたのかを探る。メルロ＝ポンティがヘーゲルを読み始めた時期である 1930 年代後半では、フランスではアレクサンドル・コジェーヴ (Alexandre Kojève, 1902–1968) のヘーゲル解釈が席卷していた。メルロ＝ポンティも、コジェーヴのゼミに熱心に参加していたことが知られている²。だが、こうした動向に対して 1940 年代から、メルロ＝ポンティの親友でもあるジャン・イポリット (Jean Hyppolite, 1907–1968) のヘーゲル解釈がもう一つの解釈として力を持ち始める。メルロ＝ポンティのヘーゲルに対する評価は後述の通り両義的なものであるのだが、本稿は、メルロ＝ポンティが賛同したヘーゲルおよび弁証法概念についての解釈とは、イポリットによるもの³だと考え、このことを伝記的かつ文献学的に裏づけていく。これを通して、本稿は、メルロ＝ポンティとイポリットによるヘーゲルの弁証法概念の解釈の特徴を明らかにし、メルロ＝ポンティを第二次世界大戦後のフランス哲学史の中に位置づけ直す。

本稿は以下の手順で進む。まず、メルロ＝ポンティの思想において、ヘーゲルの弁証法概念受容が大きな役割を担っていることを確認する (第 1 節)。次に、メルロ＝ポンティはコジェーヴではなくイポリットのヘーゲル解釈に依っていることを伝記的かつ文献学的証拠に基づいて示す (第 2 節)。続いて、ヘーゲルの弁証法概念に対するメルロ＝ポンティとイポリットによる解釈の特徴を示す (第 3 節)。最後に、第二次世界大戦後のフランス哲学史の中にメルロ＝ポンティを位置づけ直し、彼の思想を陶冶

論の文脈で読む道筋をつけたい。

1. メルロ＝ポンティの思想における二つのヘーゲル

まず、メルロ＝ポンティが自身の思想を練り上げるうえで、ヘーゲルは重要な役割を担っていたことを確認しておきたい。彼の最初期の著作である『行動の構造』から主著『知覚の現象学』、論文集の『意味と無意味』と『シーニュ』、弁証法概念の解釈史という形をとったサルトルへの批判論文である『弁証法の冒険』、そして最晩年の遺稿『見えるものと見えないもの』のいずれにもヘーゲルの名前が言及され、意識経験や表現現象、政治運動の弁証法的運動が主題として扱われる。加えて、こうした著作だけでなく、彼の講義でも多くヘーゲルへの言及がなされている。例えば、最晩年の1960–61年には、「ヘーゲル以後の哲学と非-哲学」と題された講義が行われていた。そこでは、主にハイデガーの『杣径』を用いながら、『精神現象学』の序論の講読がなされていたのである。

このように、生涯を通して、メルロ＝ポンティの思想にはヘーゲルが深く関わっているのだが、彼のヘーゲルへの姿勢は両義的なものである。例えば論考「ヘーゲルの実存主義」（1947年）で彼は、「ヘーゲルは、一世紀以来の哲学でなされた偉大なすべてのもの〔…〕の原点」（SNS 109）だと称揚する。また、「『精神現象学』は歴史全体をあらかじめ確立された論理の枠に嵌め込もうとするのではなく、各教説や各時代を追体験しようとしている」（SNS 112）とも述べる。つまり彼は、『精神現象学』のヘーゲルは人間の具体的経験の分析から出発する姿勢があるとして肯定的に評価しているのである（cf. SNS 141）。その一方で、彼は、『エンチクロペディー』第二版に見られる1827年以降のヘーゲルを「歴史のあらゆる対立が思考によってのみ克服される「思想の宮殿」しか提供しない」（SNS 111）と批判する。すなわち、彼によれば、この時期のヘーゲルは「あらかじめ確立された論理の枠に嵌め込もうとする」（SNS 112）態度をとってしまってお

り、論理の順序を逆転させた結論ありきの説明をしているのである。

このようにメルロ＝ポンティが解釈するヘーゲルには、肯定的に評価されるヘーゲル像と、否定的に退けられるヘーゲル像があるのである。この二つのヘーゲル像はそれぞれ別の解釈者の目を通したヘーゲルだと理解すべきである、と筆者は考える。筆者は別稿にて、『弁証法の冒険』を手がかりに、彼が批判するヘーゲル解釈、すなわち否定的に退けられるヘーゲル像というのは、ルカーチ、サルトルそしてコジェーヴによるものであるということを明らかにした (cf. 常深 2022)。メルロ＝ポンティによれば、彼らはプロレタリアートの誕生と成長という一個の歴史的事実を歴史の意義すべてだと考え、歴史全体を説明し尽くそうとしてしまっている (cf. AD 300)。ゆえにメルロ＝ポンティは、弁証法概念の解釈で退けるべき考え方は「歴史の終焉」(AD 301)において完全な総合がなされると考えることだ、と述べるのである。こうした考え方は、コジェーヴに見られるように、一義的で硬直した歴史解釈に陥ってしまうとメルロ＝ポンティは整理する。すなわち、人間は人間特有の意味を自分自身の手で作り出し、疎外から脱して普遍的で均質な国家を実現する必要がある、これは実際に、スターリンの手によってソヴィエト連邦として実現しつつあるのだ、という考え方に陥ってしまうのである。こうした考えに対して、メルロ＝ポンティは、「もはやヘーゲルの中心的思想を言い表すものではありえないだろう」(ibid.)とまで言うのである。

では、肯定的に評価されるヘーゲル像は誰によるヘーゲル解釈なのだろうか。「はじめに」で予告した通り、本稿はイポリットによるものだと考える。次節でその根拠を伝記的かつ文献学的に裏づけていきたい。

2. イポリットに依って立つメルロ＝ポンティ

ここで取り上げるジャン・イポリット (1907-1968) は、『精神現象学』の仏訳者であり、「はじめに」で述べたように、1940年代以降のフランスに

におけるヘーゲル解釈において、コジェーヴとは異なるもう一つの潮流を形成した研究者として知られる。ヘーゲルに対して人間学的解釈を施し、革命的唯物主義の下で歴史の終焉を謳うコジェーヴとは異なって、彼はヘーゲルのテキストに忠実に従う解釈者⁴なのである。さらに注目すべきなのは、彼はリセアンリ4世校やパリ大学にて、フーコー、ドゥルーズ、アルチュセール、デリダなどポスト構造主義の旗手を担う若手研究者たちを育成した教師⁵であるということだ。また、1954年から1963年では、彼は高等師範学校の校長を務めており、学术界で非常に大きな影響力をもった。彼は後続の世代に、人間主義に陥らないヘーゲル読解をさらにはヘーゲルを乗り越えていくヘーゲル読解の方向性を示した指導者でもあったのだ。

本稿は、メルロ＝ポンティがヘーゲル解釈においてイポリットの解釈に依って立っていると考える⁶。この根拠は大きく四つある。第一の根拠は、イポリットとメルロ＝ポンティは親友であったという事実である⁷。例えば、1946年11月23日、フランス哲学会でのメルロ＝ポンティによる学会発表「知覚の優位性とその諸帰結」の際には、イポリットはメルロ＝ポンティに対して「Tu (君)」と呼びかけて質問しており、親しい間柄であったことがわかる (cf. PP 85-88)。また、イポリットは1957年に、メルロ＝ポンティによる『精神現象学』へのコメントを以下のように紹介している。「我が友メルロ＝ポンティは、『精神現象学』についてコメントを寄せてくれたのだが、私にこう言ってくれた。「小説のように面白いね。〔『精神現象学』によれば〕現象というカーテンの向こう側には何も無い〔のだから〕」 (Hyppolite 1957=1971: 235)。このように、彼らは友人としてお互いの著作を深く読み合ったり、『精神現象学』について議論を交わしたりしていたことが予想される。

第二の根拠は、メルロ＝ポンティとイポリットの両者が『精神現象学』から好んで分析する箇所が似ている、あるいは誤った引用を同時期に両者がしていた、ということである。まず、両者が好んで引用する箇所を示そ

う。コジェーヴは『精神現象学』の「B 自己意識」の章における「主と奴の弁証法」を好んで引用し、異質な二者間の、すなわち人間と自然との、あるいはプロレタリアートの人間とブルジョア的人間との相剋の物語として読み替える傾向にある。これに対してメルロ＝ポンティとイポリットは、確かに「B 自己意識」の章にも注意を払うが、とりわけ 1950 年以降では、『精神現象学』の序文（独：Vorrede, 仏：Préface）と序論（独：Einleitung, 仏：Introduction）の読解を重視する。例えば、メルロ＝ポンティは、1952 年 6 月と 7 月に『レ・タン・モデルヌ』に掲載された論考「間接的言語と沈黙の声」において、ヘーゲルの弁証法概念の核なるものを、「おのれに立ち戻る」（S 112）あるいは「それ〔弁証法の歩み〕自体でその進路を創造し、おのれに立ち戻る歩み」（S 118）と言いつけている。この言葉は『精神現象学』の序文の第 65 段落（Hegel 1807=1939: 56）で、ヘーゲルが弁証法的運動の説明をしている箇所由来する言葉であると思われる⁸。また先に述べた通り、メルロ＝ポンティの講義「ヘーゲル以後の哲学と非哲学」は講義の半分以上も『精神現象学』の序論の読解に充てている。イポリットはといえば、「私は、主と奴の弁証法の重要性を認識しながらも、それを特別視していたわけではない」（Hyppolite 1957=1971: 239）とはっきり述べている。事実、彼は『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』で『精神現象学』の序文と序論の重要性を強調しているうえ、1953 年の『論理と実存』でもこれらの部分から頻繁に引用し、時には先に挙げたメルロ＝ポンティによる引用箇所を用いながら（cf. Hyppolite 1953: 186）、『精神現象学』と『大論理学』（以下『論理学』と略記）との関係を明らかにしようと努めているのである。では次に、両者が誤った引用をしてしまっている箇所も示そう。これは、ヘーゲルが人間を「病める動物」として定義したという文言をめぐるものである。1946 年 2 月、イポリットは「イエーナ時代の文章のなかでヘーゲルが述べているように、人間は病める動物である」（Hyppolite 1946=1955: 35）と、ドイツ学研究所で行われた講演で述べてい

る。同年、この講演に触発されたメルロ＝ポンティは、同年、論考「ヘーゲルの実存主義」にて、「ヘーゲルは、ホフマイスターが出版した『実在哲学』の初期のテキストで、「人間は病める動物である」と述べている」(SNS 116)と書いてしまった。だが、ヘーゲル『実在哲学』の中に該当の文章はない。実は、「人間は病める動物である」という一節はニーチェの『道徳の系譜学』第三論文の「一三節 病める動物」の一節(ニーチェ 2009: 239)もしくは「二八節 虚無への意志」の一節(ニーチェ 2009: 326)なのである。当のイポリットは上記の講演の一年後に、何事もなかったかのように、「ニーチェの病める動物としての人間というテーゼ」(Hyppolite 1947=1955: 180)と修正して書いている。こうしたことから、1946年時点のメルロ＝ポンティは、イポリットの論考に全幅の信頼を置いてヘーゲルを理解していたことが予想されるのである。

第三の根拠は、両者の『精神現象学』読解の傾向が共通していることである。ここでは、大きく二つの傾向を指摘しよう。第一に、彼らは『精神現象学』をフッサール現象学と近づけて、あくまで『精神現象学』の当初のタイトル通り「意識の経験の学」として読む。例えば、メルロ＝ポンティはパリ大学での講義にて「フッサールの意味での現象学は、ヘーゲル的な意味での現象学とほとんど重なり合う。このヘーゲル的な意味での現象学の本質は、[...] 経験の意味を現れさせようとして経験の中に滑り込んで、経験の中において人間を追求することにある」(SHP 70-71)と述べている。次節でも述べることになるが、彼は、『精神現象学』を、コジェーヴのように異質な二者間での相剋の物語としてではなく、あくまで意識の経験の学として忠実に読解するのである。同じく、イポリットもフッサール現象学から影響を受けつつ、「ヘーゲルの『〔精神〕現象学』は、彼としては、哲学的な自己形成小説なのである。すなわち、最初の信念を捨て、経験を通じて哲学的な視点に、つまり絶対知に達する意識の発達を追ったものである」(Hyppolite 1946: 17)と述べ、意識の経験の学として

読解するべきだと解釈している。第二に、彼らは『精神現象学』と『論理学』は相補の関係だと見るべきだ、と考える。例えば、メルロ＝ポンティは「私たちは、ヘーゲルを違った形で解釈する […] ことができる。すなわち、彼の現象学を論理学に基づけるのではなく、彼の論理学を現象学に基づけることができる」(SNS 141) と述べる。イポリットは、「コジェーヴは、ヘーゲルの『現象学』をヘーゲル体系全体から切り離して考えていた」(Hyppolite 1957=1971 : 238) として、コジェーヴのこの姿勢に反対し、『精神現象学』と『論理学』をどのように関連づけて読むべきかを生涯をかけて探った。彼は以下のように述べる。「ヘーゲルの『精神現象学』と『論理学』はそれぞれ哲学の全体であるが、しかし二つの異なった角度からのそれである」(Hyppolite 1952=1955 : 191-192)。すなわち、メルロ＝ポンティとイポリットの両者は、『精神現象学』と『論理学』は、それぞれある観点からみた哲学全体⁹ となりうるものであり、この両著作は相補的に読めるものだ、と位置づけているのである。

第四の根拠は、当時のヘーゲル解釈の潮流に対する、視座と距離の取り方が両者で一致しているということである。例えば彼らは、当時のヘーゲル解釈は「垂直的超越」か「水平的超越」のどちらかを重視するという、極端な二つの立場で割れてしまっている、と見ている (cf. S 114, 117; Hyppolite 1946 : 525)。「垂直的超越」を重視する立場とは、ヘーゲルの思想からあらかじめ定められた必然的な運命を見出すキリスト教神学者たちに見られた解釈のことを指している。反対に、「水平的超越」を重視する立場とは、ヘーゲルおよびマルクスの思想から個々人が無から意味を作り上げて政体を完成させていくことを目指すマルクス主義者たちに見られた解釈のことを指している。両者共々、本来のヘーゲルの中心的な思想というのは、この極端な二つの立場の調停を試みるものだったのだと考えるのである。しかも、イポリットは、『精神現象学』では垂直的超越を水平的超越に還元する英雄的な努力がなされていた、という表現を『ヘーゲル精神

現象学の生成と構造』の脚注で触れたにすぎなかったが、この表現を相当気に入っていたようである。例えば、彼は後年（1957年）の講演にて、自分の解釈がコジェーヴでもフェサル神父やニエル神父の解釈でもないものだと主張する際に、再び当該箇所を引用する（cf. Hyppolite 1957=1971: 240）ほどである。このように、当時の大きな二つの解釈動向に対して、彼らはどちらにも与しない中道を歩もうとしているのである¹⁰。

以上のように、メルロ＝ポンティにおいて肯定的に評価されるヘーゲルは、イポリットのヘーゲル解釈に基づくものだと考えられる。では、メルロ＝ポンティとイポリットの両者によって解釈されたヘーゲルの弁証法概念はいかなる特徴を持っているのだろうか。次節で整理していきたい。

3. メルロ＝ポンティとイポリットによる弁証法概念理解

3.1 総合なき弁証法

メルロ＝ポンティとイポリットの両者による『精神現象学』読解から導かれた弁証法概念の解釈には、大きく以下二つの類似点がある。第一の類似点は、弁証法的運動自体がもつ構造についての解釈である。すなわち、彼らが解釈した弁証法的運動とは、自己触発性を伴った自律的運動であり、かつ完全な総合はなされることのない無際限な運動なのである。前節で示した通り、彼らは、コジェーヴやサルトルのヘーゲル解釈および弁証法概念解釈には距離をとる。例えば、イポリットはコジェーヴのヘーゲル解釈とサルトルの存在論に対して、「静的で所与の即自存在である自然」と「〔能動的な〕対自存在あるいは否定性である人間」（Hyppolite 1957=1971: 240）という二つの存在者の相剋の物語にしまったものだと断ずる。加えて彼は、「コジェーヴはハイデガーの哲学を人間学と解釈する、当時よくあった誤読をしていたのだろう。しかし、その誤読は—それはサルトルのものでもあるのだが—天才的なものであった。コジェーヴが要求した二重の存在論を、サルトルは『存在と無』で実現したのだ」（ibid.）と皮肉

を込めて述べる。メルロ＝ポンティとイポリットは、コジェーヴやサルトルらのように、弁証法が、異質な二者間での相剋を経て、その二者の性質を併せ持つより高次な一者になるというようなプロセスだとは考えない。そうではなく、「すでにそこにあったものについての明確化」という意識経験の「自己形成 (Bildung)」(NC 293) 運動だと考えるのである。言い換えれば、彼らが『精神現象学』の序文と序論から読んだのは、意識経験がそれ自体で充実したり幻滅したりして内容を明確にしていくといった自己触発性を伴った運動である、ということなのである。

このような解釈を施すメルロ＝ポンティは、ヘーゲルの弁証法概念を①自己運動 (automouvement) であり、②経験であり、③両義性をもった運動である、と三つの特徴でまとめている (cf. NC 292, 304)。とりわけ最後の両義性をもっているという弁証法概念の特徴とは、意識経験という自己触発性をもった弁証法的運動が、完全に否定されたり肯定されたりすることなく、終わりなく続いていく、ということである。言い換えれば、弁証法的運動が目指すところの「絶対者」あるいは「絶対知」は「否定主義にも肯定主義にも肯定されない、否定の否定」(NC 352) であるがゆえ、弁証法は完全な総合へと向かうものではない、ということをもメルロ＝ポンティは述べるのである。

こうした帰結を、メルロ＝ポンティはイポリットの著作を引用した後で述べている。例えば、彼はイポリットの『論理と実存』における「それ〔マルクスが言うところの人間の自然〕は、歴史的な相剋が解消した後に、続いて現れるであろうものである。〔こうした考えには、〕肯定性が最初のものであり最後のものになるであろうし、この肯定性には亀裂が入ってはいけないうし、否定的なものは一切ない」(Hyppolite 1953 : 239) という一節を引用していた。ここでは、イポリットは一部のマルクス主義者(おそらくルカーチ)¹¹のヘーゲル読解を批判している。この人間の自然とは、コジェーヴの言う「歴史の終焉」の後の事態のことを指している。イ

ポリットもメルロ＝ポンティと同じく、プロレタリアートが果たすべき政体を完成させるはずだという考えを、政治の歴史的運動の中に当てはめて、歴史すべてを解釈しようとしてしまったマルクス主義者を非難しているのである。イポリットによれば、こうした解釈は、歴史の特殊な一局面によって近い将来を性急に説明しようとしたものであり (cf. Hyppolite 1951=1955 : 101), 当の解釈者の哲学的関心によって用意された結論ありきの主観的解釈にすぎないがゆえ、正当化できる保証がないのである。イポリットは、メルロ＝ポンティの引用で省略された箇所でも、以下のようにも述べている。「ヘーゲルにとって、〈絶対者〉は、決して不動の総合なのではないだろう。ヘーゲルの立場は常に否定を含み、相剋の緊張を含んでいるものなのだ。しかし、マルクスは、経験主義と同じく、肯定から、つまり即自的には否定されない無媒介性から、[そういった]自然から出発しているのである」(Hyppolite 1953 : 238)。したがって、ヘーゲルに忠実であろうとするメルロ＝ポンティとイポリットが解釈した、弁証法的運動が目指すところの〈絶対者〉概念とは、否定の否定を可能にする、すなわち無限に続く弁証法的運動を可能にするものなのである。

メルロ＝ポンティはこの弁証法的運動を「制度」と言い表し、「常にそれが意味するものによって発展していく」ものでかつ、「永遠普遍の理念に従ってではなく、その制度に関して偶然の出来事をその法則の下へと多かれ少なかれ還元しながら、それらの出来事がもつ示唆によって制度自体も変わることを許容しながら、発展していくもの」(AD 98)として記述している。そして晩年期の彼は、研究ノートに繰り返し「私は目的論者ではない」(VI 312, 313)と書き、上記の弁証法概念の解釈に、「総合なき弁証法 (la dialectique sans synthèse)」(VI 127)あるいは「超弁証法 (hyperdialectique)」(ibid.)と名づけるのである。同じく、イポリットも、「ヘーゲルの『現象学』が自らに提起しているのは、[...] 経験を通して—しかも時として歴史の偶然性のなかにある—解明されるこれらの本質の理念的な生成に達す

ることだ」(Hyppolite 1952=1955 : 194-195)と書いている。すなわち、前段落で述べたような仕方では弁証法的運動の構造を考えることによって、彼らは、歴史は偶然性を持ちながら、一つの目的に収斂することなく開かれたものだと考えるのである。言い換えれば、彼らは、ヘーゲルの思想を歴史哲学として読む際、歴史における偶然性の中で、ある一つの目的に進むことはないとしても、その中に合理性を見出していける人間の姿を描こうとしているのである。

3.2 各表現領域での弁証法的運動

メルロ＝ポンティとイポリットによる弁証法概念解釈には、もう一つ類似点がある。それは、何についての弁証法的運動について語っているのかを、明確に区別して分析するべきだ、という方法論上のものである。今、私たちが語っている弁証法的運動とは、何らかの対象についての経験の構造を特徴づけたものである。すなわち、ここで扱う経験の対象は、数学的对象でもありうるし、言語や文学作品でもありうるし、政治現象でもありうる。このような経験対象ごとに、あるいは表現領域ごとに弁証法的運動を区別して分析しなければならない、と彼らは考えるのである。

こうした姿勢は、彼らのテキストから伺うことができる。まず、メルロ＝ポンティにおける弁証法に対するアプローチを見てみたい。彼は論考「間接的言語と沈黙の声」や「アルゴリズムと言語の秘儀」(『世界の散文』所収)などで文学や絵画といった芸術作品についての経験や数学的对象に対する経験を取り上げている。その際、彼は自身の分析をヘーゲルの名前を挙げ、以下のように位置づけている。

ヘーゲルは、おおよそ以下のことを言っている。弁証法とは、「それ〔弁証法の歩み〕自体でその進路を創造し、おのれに立ち戻る歩みである」と。〔…〕したがって、これは私たちが表現現象という別の名

前で呼んでいるものであり、合理性の神秘によっておのれを取り上げ直しおのれを再開するものである。そして、もし人が歴史という概念を、芸術や言語の例に基づいて形成することに慣れれば、おそらく、歴史概念を、その真の意味において再発見するだろう。(S 118)

彼は、表現領域ごとに見られる弁証法的運動を記述することを、すなわち作家や画家や数学者がもつ経験についての分析から、芸術表現や学問が生み出される弁証法的運動（各表現固有の歴史がもつ自律的運動）を記述することを試みているのである。

このように表現領域ごとにその弁証法的運動を分析する理由とは、各経験の対象は確かに人間の知覚および行為に影響を受ける部分があるが、その経験対象が属するところの各表現領域内にはそれ固有の記号の使用規則とも言うべきものがあるためである。メルロ＝ポンティは文学と政治とを架橋したアンガジュマン文学を呼びかけるサルトルを念頭におきながら以下のように述べる。

本当にすべての行為がシymbol的であるならば、書物もその仕方で行為であり、何らかを明らかにするという義務を損なうことなく、〔独自の〕技巧がもつ規則に従って書かれる、という価値を持っているのだ。もし政治が直接的かつ全面的に責任を負うものではなく、歴史的なシymbol機能の暗闇に線を引くことで成り立っているのなら、政治もまた技巧であり、その技法がある〔ということになる〕。政治と文化が合流するのは、〔…〕両者それぞれの秩序のシymbolが、他方の秩序の中で反響し、対応し、帰納的な効果をもたらすからである。文学と政治とを異なる活動として認識することは、おそらく文学に対しても〔政治的〕行為に対しても忠実である唯一の仕方である。(AD 294)

重要なのは、確かに文学も政治も同じく世界の中でシンボリックな行為として発現したものでありながらも、これらはそれぞれ異なる秩序のもとにある、ということである。こうして、世界に存在する各表現領域の記号は、それぞれ自律的に振る舞い、人間身体にこう知覚せよと促しを与えるものだ、とメルロ＝ポンティは考えるのである。最終的に、あらかじめ規定された規範ではないのにもかかわらず一定の方向性や記号の使用規則を指示する体系のことを、彼は「制度 (Stiftung, institution)」と語り、個別の表現領域における制度の存在論を構想していくことになる¹²。

イポリットもメルロ＝ポンティと同じく、領域横断的に経験のあり方の分析を行って、その弁証法的運動を明らかにしようと努めてきた。例えば、彼はあるところでは、メルロ＝ポンティと同じくヴァレリーの詩作活動に注目し、サルトルが言うところの人間に課せられた自由に対して疑義を呈する (cf. Hyppolite 1951=1971 : 864-876)。別のところでは彼は、数理哲学者ジャン・カヴァイエスの弁証法解釈を手がかりに、数学的経験における弁証法的運動に注目をする (cf. Hyppolite 1953 : 64-65; 1952=1955 : 194)¹³。そして、『精神現象学』の企てを妥当なものとして正当化する必要を以下のように強調する。

『精神現象学』では、芸術家や哲学者の目的であるこれらの本質の啓示が研究されるが、しかしこれらの本質は存在自体とは区別される。〔…〕絶対知、つまりヘーゲルの論理学となることを拒む『〔精神〕現象学』の帰結は、確かに、経験の豊かさ全体とこの経験の表出様態の一覧表を作成する一種の文化哲学ではあるが、人間主義すなわち人間による存在解釈を超えてはいないのだ。〔…〕個別的体験を普遍へと置き換えるには置き換え自体の可能性が示されなければならない、またこれらの本質が真に存在の本質であることも示されなければならない。そうでなければ、それら〔これらの本質〕は徹底的な主観化の危

険に晒されてしまうのだ。それゆえ、〔この論証がされないままの〕この現象学的哲学は、〔…〕人間学や人間主義になってしまい、こう言ってよければ、真の哲学となることはない。〔…〕意識の哲学だけでは、超越論的自我の観念に頼っても、この主観化に常に行き着いてしまうのだ。（Hyppolite 1952=1955 : 193-194）

イポリットによれば、現象学は、一人称的な観点から私たちのさまざまな経験の本質を探求することで、世界のあり方を探る学問である。だが、私たちの個別の経験のあり方を探るだけでは、世界のあり方が正しく解明されたかどうかは保証されていない。つまり、その個別的な経験を一般化することができ、世界が本当にその経験に対応するあり方をしているかどうかを正当化できるものが必要になるのである。そうでなければ、コジェーヴのように個人の主観以上のものにはならない「人間学や人間主義」に陥ってしまう、というわけである。

ここでイポリットが注目するのは、ヘーゲルの『論理学』の役割である。

ヘーゲルの『論理学』は、まさに経験を通して解明されるこれらの本質の弁証法であるのだし、人間の意識を通して絶対的におのれを思惟する存在として、それらの本質を正当化するものでもある。（Hyppolite 1952=1955 : 195）

イポリットは、ヘーゲルの『論理学』こそが『精神現象学』の企てを、正当化する尺度を経験内部の構造から与えてくれるものだと考える。言い換えれば、『論理学』によって、『精神現象学』の企てが正当化され、世界に何がどのように存在するのかを語ることができる、と彼は考える。こうした哲学を、彼は「人間が多かれ少なかれ正確に存在を語るのではなく、存在

が人間においておのれを語り、おのれを表現する」(Hyppolite 1952=1955 : 189) という哲学だと言い表し、徹底的に人間中心主義的な哲学からの脱却を図るのである。

まとめよう。メルロ＝ポンティとイポリットが言うところの現象学とは、一人称的な観点から、私たちがもつ表現領域ごとの経験の構造を探求することで、世界のあり方を理解するものである。だが、このままでは世界のあり方が正しく解明されたかどうかが正当化されておらず、ややもすればコジェーヴやサルトルに見られたように、ある特定の目的へと駆り立て、それを人間の行動指針にしてしまう人間主義的なヘーゲル解釈になりかねない。こうした解釈に陥らないためにメルロ＝ポンティとイポリットがとる方策とは、上記のように個別的な表現領域における具体的な経験のあり方の分析からはじめ、その内的必然を見出していくことに他ならない。こうした内的必然をメルロ＝ポンティによれば各表現領域で判明する「制度」論が、イポリットによれば『論理学』が正当化するのである。

おわりに

本稿は、メルロ＝ポンティがイポリットと共にヘーゲルを解釈し、フランスにおいてコジェーヴとは異なるもう一つのヘーゲル受容の潮流を形づくっていたことを明らかにした。そして本稿は、彼らのヘーゲルの弁証法概念に対する解釈がもつ二つの特徴を明らかにした。第一の特徴は、メルロ＝ポンティとイポリットのヘーゲル解釈によれば、弁証法的運動が向かう〈絶対者〉とは、否定の否定を可能にするものである、ということだ。ここで、彼らが解釈する弁証法的運動とは無限に続く「総合なき弁証法」なのであった。この解釈は、人類の進歩、全人格的な発達、理想的な一つの政体などに向かうような「大きな物語」に回収される目的論にはならないものである。むしろ両者は、ヘーゲルの弁証法に対して、一つの目的に収斂することはないものの、偶然性の中にある合理性を見出していける人

間の姿を描くのである。

第二の特徴は、メルロ＝ポンティとイポリットの両者は、ある経験の弁証法的運動を見出す際に、その経験対象の本性ごとにすなわち表現領域ごとに分析を進め、その表現領域内にある記号の使用規則の解明に専心する、ということである。こうした両者の姿勢は、フランス哲学において、科学史研究から科学的認識の系譜を分析しようとしてきたフランスエピステモロジーの系譜に入ると思われる。これまで、メルロ＝ポンティは人間主体の哲学をなしていたとか、人間主義的な実存主義者であったと広く理解されてしまっていたかもしれない。例えば、フーコーは、第二次世界大戦後のフランス哲学界において、「経験、意味、主体の哲学」と「知、合理性、概念の哲学」に分割されていたと整理する。そのうえで、カヴァイエス、バシユラール、カンギレムらが担っていた「知、合理性、概念の哲学」の系譜とは異なって、メルロ＝ポンティはサルトルと同様に「経験、意味、主体の哲学」の系譜を担っていたとされる（cf. Foucault 1985=1994: 764）。だが、ある表現領域の歴史が持つ自律的な運動にすなわち弁証法的運動に着目して、その表現領域内にある記号の使用規則を解明しようとするメルロ＝ポンティとイポリット両者の姿勢は、「知、合理性、概念の哲学」に注目するフランスエピステモロジーの姿勢そのものである。現に、イポリットはフランスエピステモロジーを担う後続の世代にとっての指導者であった。したがって、メルロ＝ポンティも、こうした後続の世代にとっての隠れた指導者であったと考えねばならないだろう。

こうして判明したメルロ＝ポンティとイポリットによる弁証法概念理解は、第二次世界大戦後のフランスにおける教育思想史の中でアクチュアルなものであり続けていると想定できる。人の発達の多様性およびその要因の多元性が解明されている現代において、単一の理想像や全人格的な発達を目指す「大きな物語」に還元される陶冶論は、もはや力を持ち得ないだろう。これに対して、ヘーゲルの弁証法概念についての彼らの理解は、現

在の偶然的な状況に合理的に対処して、世界に対して多様な認識を展開していく人間の姿を考える陶冶論となりえるだろう。こうして彼らの理論から導かれうる陶冶論が教育思想史の中にどのように位置づくのかについての検討は、今後の課題としたい。

※ [付記]: 本稿は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2123 の支援を受けた成果の一部である。

註

- ¹ 例外的に、Vuillerod (2018) はメルロ＝ポンティとイポリットとの関係に着目し、メルロ＝ポンティの弁証法解釈は「開かれた全体性、歴史の問題性、間主観性」(Vuillerod 2018: 108) を担保するという 3 つの特徴がある、とまとめている。本稿はこの解釈を支持し、こうした特徴を可能にしたメルロ＝ポンティとイポリットによる弁証法概念の内的構造と、弁証法概念への現象学的アプローチとを示している。
- ² このゼミは 1933 年から 1939 年までに高等研究実習院にて開講されたものである。これは今日では、出席者が錚々たる顔ぶれであったことから、コジェーヴのカリスマ性を伝えるものとなっている。出席した人物に関しては書物によって異なるが、レイモン・アロンの記憶を鑑みるに、ジョルジュ・バタイユ、前任のアレクサンドル・コイレの他、レイモン・クノー、ジャック・ラカン、モーリス・メルロ＝ポンティ、エリック・ヴェイユ、ガストン・フェサルらが熱心な聴講者である (cf. Aron 2010: 136)。オフレによるコジェーヴの評伝によれば、メルロ＝ポンティは甥ジャックとゼミに参加していたという (オフレ 2001: 375)。なお、メルロ＝ポンティは多くても 1935 年度から 1939 年度まで出席可能だったと考えられる。というのも、彼は 1935 年にカイマン (復習教師) として赴任するにあたってボーヴェからパリへと引っ越し、地理的に参加できる状況になるためである (cf. Geraets 1971: 26–27)。
- ³ イポリットとコジェーヴのヘーゲル解釈の違いについては Jarczyk et Labarrière (1996) および Vuillerod (2017) が詳しい。
- ⁴ 例えば、1957 年にはイポリット自ら、『精神現象学』のフランスでの導入の仕方は二つあり、一つがコジェーヴのゼミであり、もう一つが自分の『精神現象学』の仏訳刊行だと述べている。さらに、彼はコジェーヴのゼミを「知らなかった [無視していた]」(Hyppolite 1957=1971: 236) とも言う。ここから、彼がコジェーヴとは異なる解釈者として自身を位置づけようとしていることがわ

- かる。事実、コジェーヴのゼミが開講されていた 1930 年代、彼はリモージュ、チュール、ブルジュ、ランス、ナンシーといった地方のリセで教師をしていた関係上、そのゼミを受講すること自体がほぼ不可能であったようだ (cf. Bianco 2013 : 12)。この約 10 年の時期に、彼は『精神現象学』の翻訳を進め、前半部を 1939 年に、後半部を 1941 年に出版することになる。
- ⁵ フーコーとドゥルーズは、アンリ 4 世校およびパリ大学にてイポリットから指導を受けている。アルチュセルは高等師範学校哲学科にて書記としてイポリットと関わっている。デリダにとっては、イポリットが教授資格論文の指導教官であった (cf. Bianco 2013 : 13, 15; 西山 2008 : 95)。
- ⁶ Vuillerod (2018) は、メルロ＝ポンティのヘーゲル解釈は、マルクスおよび共産主義者とサルトルそしてコジェーヴの解釈に反対し、イポリットに依ったものだと主張する (cf. Vuillerod 2018 : 107)。
- ⁷ 両者とも高等師範学校 (メルロ＝ポンティは 1926 年、イポリットは 1925 年) に入学しており、イポリットの方がメルロ＝ポンティより 1 学年上であったが、親しい交友関係があったと言われる (cf. Bianco 2013 : 10)。だが⁸ Le Baut (2011) によれば、二人の間での友情は 1940 年代からと遅れてやってきたという (cf. Le Baut 2011 : 22)。
- ⁸ イポリットによる翻訳原文は「*La proposition doit exprimer ce qu'est le vrai, mais essentiellement le vrai est sujet; en tant que tel il est seulement le mouvement dialectique, cette marche engendrant elle-même le cours de son processus et retournant en soi-même.* (命題は、真なるものが何であるかを表現すべきであるが、本質的に真なるものは主体〔主語〕である。そのようなものとして、真なるものはただ弁証法的運動なのであり、この歩みはそれ自体でおのれの過程の進路を生成し、おのれに立ち戻るのである)」。これをメルロ＝ポンティは、以下のように言い換える。「ヘーゲルは、おおそ以下のことを言っている。弁証法とは、「それ〔弁証法の歩み〕自体でその進路を創造し、おのれに立ち戻る歩みである (une marche qui crée elle-même son cours et retourne en soi-même)」と」(S 118)。
- ⁹ イポリットは「おそらく、『エンチクロペディー』では、『〔精神〕現象学』はもはや特殊な位置をもつものでしかなく、またはやある観点から見た体系〈全体〉を構成することはないであろう」(Hyppolite 1946 : 582) と述べる。この「ある観点から見た体系全体」という文言は、メルロ＝ポンティが講義「ヘーゲル以後の哲学と非-哲学」にて好んで引用する箇所である (cf. NC 286, 317, 320)。メルロ＝ポンティによるヘーゲル評価は、『精神現象学』が「ある観点から見た体系全体」となっているか否かに関わる。
- ¹⁰ 「垂直的超越」と「水平的超越」の中道を歩むにあたって最も退けるべき解釈をした者がコジェーヴだ、とメルロ＝ポンティは考えているようだ (cf. 常深 2022)。コジェーヴの解釈に対する、メルロ＝ポンティとイポリットによる

距離の取り方も似通っている。前節で示したように、メルロ＝ポンティはコジェーヴのヘーゲル解釈を退ける (cf. AD 301)。イポリットも「[コジェーヴにとっての]『精神現象学』は、この歴史の終焉、すなわち人間の否定性の作用に達する人間精神の叙事詩であろう」(Hyppolite 1957=1971 : 237) と言い、「私は、コジェーヴの解釈はあまりにも単に人間学的であると考え。絶対知は、ヘーゲルにとって神学でもなければ、人間学でもない」(Hyppolite 1957=1971 : 241) とコジェーヴの解釈を退けている。

- ¹¹ イポリットのこの主張は、論考「疎外と物象化」におけるもの (cf. Hyppolite 1951=1955 : 100-101) と同じくする。このテキストは、ルカーチの『若きヘーゲル』や『実存主義かマルクス主義か』でなされたマルクス主義の立場からの実存主義批判に、反論するために書かれたものである。
- ¹² Gault (2018) は、メルロ＝ポンティの「制度 (Stiftung)」概念は「存在論」だと考える。なお、メルロ＝ポンティにおける絵画表現の Stiftung-存在論については別稿で扱う。
- ¹³ 論考「ヘーゲル論理学についての試論」では、イポリットはカヴァイエスの『論理学と学知の理論について』の最後の三文 (Cavaillès 1947=2008 : 90) を引用している (cf. Hyppolite 1952=1955 : 194)。翌年出版の『論理と実存』では、彼はさらに同書から多くの引用 (Cavaillès 1947=2008 : 78, 82, 85, 85-86) をして、肯定的な解釈を施す (cf. Hyppolite 1953 : 64-65)。

文 献

メルロ＝ポンティの文献と略号一覧

- [AD] : *Les aventures de la dialectique*, Paris : Gallimard, 1955.
- [NC] : *Notes des cours au Collège de France : 1958-1959 et 1960-1961 / Maurice Merleau-Ponty*; texte établi par Stéphanie Ménasé, Paris : Gallimard, 1996.
- [PP] : *Le primat de la perception et ses conséquences philosophiques*; édition établie par Jacques Prunair, Lagrasse : Verdier, 2014.
- [S] : *Signes*, Paris : Gallimard, 1960; reed., Paris : Gallimard, coll. « Folio essais », 2001.
- [SHP] : *Les science de l'homme et la phénoménologie*, Centre de documentation universitaire, 1975.

[SNS] : *Sens et non-sens*, Paris : Éditions Nagel, 1948.

[VI] : *Le visible et l'invisible*, Paris : Gallimard, 1964 ; reed., Paris : Gallimard, coll. « Tel », 1979.

その他

Bianco, G. (2013), « Introduction : Jean Hyppolite, intellectuel-constellation », *Jean Hyppolite, entre structure et existence*, sous la direction de Giuseppe Bianco, Paris : Rue d'Ulm, pp.9–29.

Cavaillès, J. (1947=2008), *Sur la logique et la théorie de la science*, Paris : J. Vrin.

Cueille, J.-N. (2000), « La profondeur du négatif. Merleau-Ponty face à la dialectique de Hegel », *Chiasmi International no. 2 : Merleau-Ponty, De la nature à l'ontologie*, Paris : Vrin, pp. 301–335.

Dastur, F. (2009), « Merleau-Ponty et Hegel : Ontologie et dialectique », *Chiasmi International no. 11 : Penser sans dualismes aujourd'hui*, Paris : Vrin, pp. 33–48.

Foucault, M. (1985=1994), « La vie : l'expérience et la science », *Dits et écrits*, Bd.4 : 1980–1988 ; édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald avec la collaboration de Jacques Lagrange, Paris : Gallimard, pp. 763–776.

Gault, S. (2018), “Tracing Merleau-Ponty's passage to ontology an interrogation of the concepts of Fundierung and Stiftung,” *Chiasmi International no. 19 : Merleau-Ponty, Penser le dehors : politique, esthétique, ontologie*, Paris : Vrin, pp. 345–369.

Geraets, T. F. (1971), *Vers une nouvelle philosophie transcendantale : La genèse de la philosophie de Maurice Merleau-Ponty jusqu'à la Phénoménologie de la perception*, La Haye : M. Nijhoff.

Hegel, G.-W.-F. (1807=1939), *La phénoménologie de l'esprit*, tome 1, traduction

- de Jean Hyppolite, Paris : Aubier, Éditions Mouton.
- Hirose, K. (2015), « Instituer le chiasme — A partir du cours sur Hegel de Maurice Merleau-Ponty », *Chiasmi international no. 16 : Merleau-Ponty, Entre hier et demain*, Paris : Vrin, pp. 221–238.
- Hyppolite, J. (1946), *Genèse et structure de la phénoménologie de l'esprit de Hegel*, Paris : Aubier.
- (1953), *Logique et existence : essai sur la logique de Hegel*, Paris : Presses universitaires de France.
- (1955), *Études sur Marx et Hegel*, Paris : M. Rivière.
- (1971), *Figures de la pensée philosophique*, Paris : Presses universitaires de France.
- Jarczyk, G., Labarrière, P.-J. (1996), *De Kojève à Hegel : 150 ans de pensée hégélienne*, Paris : Albin.
- Le Baut, H. (2011), *Présence de Merleau-Ponty*, Paris : L'Harmattan.
- Vuillerod, J.-B. (2017), « Hegel et ses ombres : Alexandre Kojève et l'anti-hégélianisme français des années 1960 », *Les Temps Modernes*, pp. 91–114.
- (2018), « Merleau-Ponty hégélien? », *Chiasmi international no. 19 : Merleau-Ponty, Penser le dehors : politique, esthétique, ontologie*, Paris : Vrin, pp. 101–114.
- 常深新平 (2022) 「メルロ＝ポンティにおけるヘーゲル主義—コジェーヴに対抗するメルロ＝ポンティとベンヤミン」(日本メルロ＝ポンティ・サークル第 28 回研究大会の発表原稿, 2022 年 9 月 3 日).
- ドミニク・オフレ (今野雅方訳) (2001) 『評伝アレクサンドル・コジェーヴ—哲学, 国家, 歴史の終焉』, パピルス.
- 西山雄二 (2008) 「欲望と不安の系譜学—現代フランスにおける『精神現象学』の受容と展開」『ヘーゲル現代思想の起点』, 社会評論社,

メルロ＝ポンティにおける弁証法概念受容

82-101 頁.

フリードリヒ・ニーチェ (2009) 『道徳の系譜学』, 光文社.